

# 女性たちよ、語りなさい、書きなさい

——「女性論」を担当して

西川 直子

十二月二十日、火曜日。一九九四年度、最後の授業。出席者四十五名（教えまちがえがあるかもしれませんが）が、この一年間を振りかえり、それぞれ感想を語ってくれました。本学で最初の「女性論」の受講者たちが一年間の体験をどのように受けとめたのか、たいへん興味をそそられながら聞き入りました。というのも、授業の講義でも、学外講師の先生方の講演でも、学生たちの反応はどちらかといえば積極性に欠け（とはいえ、これはどの大学にも共通の現象ですが）、その表情からは講義・講演の内容をどう思ったか、うかがい知ることが難しかったからです。

ところが、受講生たちの一言ずつの感想を聞いてゆくうちに、ほぼ二十歳の若い女性としての実体験にたつて、彼女たちがきわめて身近で切実な問題として講義・講演を受けとめていたということを感じとることができたのです。

これは、体系的な女性学には素人で、フランスの記号論・言語論への関心から女性論に接近したという経緯をもつ（つまり、今までフランス語やフランス文学の授業経験は長いものの、女性学の授業を担当するのは初めての）私にとっては、とても新鮮で感動的な出来事でした。私自身、内藤和美先生や豪華な顔触れの学外講師の諸先生のお話を学生たちと一緒にききながら、多面的に勉強させていた一年間でしたので、学生たちには一種の仲間意識を感じていました。黙しがちだったその大勢の仲間たちの、生の声を耳にすることができただけで、私にとってはすでに感激に値する事柄だったのかもしれない。

ここで彼女たちの言葉をそのまま再現することは残念なかもしれませんが、若干のコメントや私自身の反省を織りませながら、できるかぎり肉声をいかす形で要約して、記

録に残したいと思います。

\*

一 「男は外、女は内という性別役割に気づかされた。

女に仕事は無理ときめつけられているのに気づいた」「専業主婦の母親が幸せそうにみえたから、自分もそれでよいと思っていたが……」「女は結婚してしまえばそれでよいという環境で育ってきたので、今まで気がつかなかったが……」「性別役割に女性はもつと反発すべきだと思う」「性別役割ではなく、個人としての自分を大切にして生きてゆくことで、社会に貢献できるのではないか……」等々、生育歴や教育を通して身につけていた性別役割の考えを再検討するきっかけをつかんだ、と述べた人たちは五名。

二 「女だからという甘えが自分のなかにあった」「女だから力仕事をしなくてもよい、とか、女だから……という言い訳を多くしてきた。この言い訳を通用させないで、頑張りたいたい」「自分がいかに、社会のなかの女性としての自分を差別していたかに気づいた」「女のなかに男性を崇拜する意識があることに気づいた」「女性は保護されて初めて男女平等になれるとも言われるが、女性の甘えを考え直さなくては……」等、女としての自分自身のなかにある甘えや女性差別、それと表裏をなす男性崇拜に気づいたとした人は、六名。性別役割をすすんで受け入れていく女性た

ちの側の意識のメカニズムに、自覚的になったということになるだろう。

三 「これから自分がどのように女性として生きてゆくのか、考えはじめた」「私は今、社会のなかでの自立ということを考えている」「自立して社会に出るといふ考えをもったひとが、女にも多いと思う」「経済的自立がなければ精神的自立はない、という言葉が印象的……」「自分で生き方を選択して自立し、自分によい道を進む強い女性をめざして、今までの生き方を改善しなくては……」等々、自立の方向への踏み出しを語った人、五名。前記一、二から三への流れは、当然のものだろう。

四 しかし同時に、女性の自立の困難さを実感している。「女性が働くことの難しさを痛感した。卒業後のことを考えてしまう……」「能力があれば社会で認められると思っていたが、女は仕事をもって多くは補佐役にまわされてしまうというつらい現状を理解した」「主婦優遇策によって、女性の社会進出が阻まれていることを知った」

これらの意見の持ち主四名は、いずれも「女性の自立のために社会を変えてゆく必要性」を訴えている。このなかには、外で働き一人で家事もこなす母親の大変な姿をみて育ってきたという人が一名。

五 結婚について語った人、一名。「ボーヴォワールは結婚という形態は選ばずに、しかし生涯を通じて愛する人がいた。結婚とは何なのか?と考えさせられた」学生たちの年令からいって、恋愛や結婚についての発言がもっとあるかと思っていたが、結果は意外だった。もっとも、時間の制約から、ほとんどの学生が一テーマしか話せなかったせいかもしれない。また、プライベートにかかわる話題は、授業時には出せないということかもしれない。

六 女性という存在については——「女性の社会進出は難しいかもしれないが、女としての甘えを克服すれば、女性が多様な生き方ができる」「女のほうが社会を変えていく意欲があると思う。男性は保守的。男性を（女性の側に）引き込んでゆく必要がある」「女性には破壊の作業が必然的にとまなうのではないか?産む存在である女は、同時に破壊もおこなうのでは?」この最後の意見の持ち主は、西太后や日野富子といった歴史上の女性が乱世を招いた例を挙げたが、おもしろい着眼目である。また「女であることを否定的にしか捉えなかったが、今では肯定的に考えられるようになった」という、うれしい感想も。

七 なんといっても印象的だったのは、母と娘関係の問い直しの経験を得たと述べた人たちが多かったこと。母親

や、母親との関係に言及したひとは十名を数えた。「母と娘の関係に関心をもっている」「母とのあいだのジェネレイション・ギャップに悩んでいる。ボーイ・フレンドとの旅行のことなど、話さない事柄が多い」「母は性別役割をいやいや受け入れている。もっと反発すればよい……」「母は保守的な父に文句をいうだけ……」「母と娘の関係にいちばん関心を抱いている。世代を越えて理解する必要性を痛感する」「母の世代・娘の世代の価値観の違いを教わった。母への見方が変わってきた」「母と女として話をする機会がもてるようになった」「母と娘という身近な問題にも女性学が必要とわかった」等々。

表面にはあらわれてこなかったが、おそらく母親との確執をかかえたひともいるにちがいない彼女たちの、このような言葉をききながら、女性にとっての他者という問題を私はあらためて考えさせられた。男性主体の自己同一性の確立のために女性是他者とさせられるという観点は、『第二の性』が打ち出した重要なテーゼであるが、以来、女性にとっての他者は誰/何か?という問題に関して、フランスの精神分析派女性論はおおいに論じてきた。他者である女性にとっての他者は母にほかならないという立場を強力に主張したのは、イリガライであり、シクスーである。それによれば、娘は母と抱擁/格闘をおこないながら、母から力を得ているという。男性の場合、前エディプス期か

らエディプス期への切断が比較的明瞭に画されるのに対し、女性の場合は前エディプス期的母 $\parallel$ 娘関係が成長後もながく続くらしいという観察がなされている。フロイトも指摘しているように、女性を理解するには、前エディプス期の説明が不可欠なのである。女性のなかで、母からの分離 $\parallel$ 反発と、母への同一化 $\parallel$ 愛着は、反転しながら終わることなく続いているのかもしれない。

受講生たちの発言から推察する限り、とくに異性愛以前の段階にある若い女性たちは、自分の母親を他者とし、鏡として、自己形成すると確かに言えるのではなからうか。私の今年の授業では、時間配分の関係からボーヴォワール以降の他者論をじゅうぶんに展開できなかったのが残念だが、来年度の課題として、他者としての母を多レベルにおいて論じなくてはならないと、痛感させられた。

八 女性学、あるいは授業については——「女性史、女性学の歴史がまだ始まったばかりであることを知って驚いた」「女性学にもいろいろな視点があることがわかった。人間らしさへと向かう女性学がよい」「女性学が学問として成り立つのか、よくわからない。男性の側のことも考えなくてはならないのではないか……」「女性学の授業に男性側の視点を導入してほしい」「女性学という学問を存続させてゆくべきか、すこし疑問に思う。男性優位の逆転で、

女性中心になるのではないかと不安。女性学があり、男性学があり、それが人間関係学となっていくたらいいと思う」等。女性という限定を冠した学への疑念・不安と同時に、男女を越えた普遍的人間像・人間関係論への欲求をうかがわせる意見が、四名。これは傾聴に価する感想であり、来年度の課題として汲み上げる必要があるだろう。専任の男性教員、川本隆史氏の出番である。さらに、「女の被害者意識はよくない。よけい差別を招く」「女性は被害者意識をもちすぎないほうがいい。授業でも、そうかな?と、同感できないこともあった」等の感想も出た。二名。高度先進国の日本の現状において、女性差別が苛酷さの刻印を消し、よりソフィスティケートされた形で浸透している結果の現れでもあろうし、同時に、前記二と同様の、女の甘えへの(自己)嫌悪の表れでもあろうか。

これとは対照的に、女性の差異を肯定し、女性文化への関心をうかがわせる感想も。「女性の特質を受け入れたい。女性でしかできないもの、女性がもたらしたものを、もっと知りたい。女性独特の文化について、授業でもっと触れてほしかった」これもまた重要な指摘であり、来年度の主要課題になるだろう。

「これから自発的に女性学を勉強してゆく気はないが、講師陣が豊富で、授業はおもしろかった」「女性学の研究者という点、こうるさい女性だとおもっていたが、講師の

先生方は柔らかない、母親のようなひとが多くて、偏見がとれた」等、おおむね女性学や授業内容に親近感を抱いてくれたようだ。特筆すべきは、女性学がきわめて倫理的な学であることを理解したように思われることである。「学問は理性・知性の問題のみでないことを知った。女性学は女性のためのものであるが、何かのために……ということも、学問として大事であることがわかった」「女性学を学ぶという知識のレベルのみでなく、女性学をすることの大切さを知った」「これからも女性学をしてゆきたい」「学問は机上のものと思っていたが、女性学は実体験と直結しているのを実感した」「身近なことを考えるにも女性学は必要」「子育ての重要性がわかった。男・女でなく、人間として育てたい」「女性学を發展させてゆくにあたっては、もっと生き方を示す必要があるのではないか……」等、女性学が、いかに生きるかという問題に直結した学問であることを実感したようである。

学生たちは、女性として生きていくうえでの指針をもとめているようにも感じられる。いかに生きるかは個々人の選択と実践に関わる問題であって、女性学といえども手っ取り早い指針を与えられるわけではない。だが、大学の学部での女性学は、女子学生たちがその選択と実践をおこなうさいの知識と勇気と知恵になること、支えになることを第一に願っているのではないだろうか。女性が女として人

間を生きるうえでの、多様な生き方の可能性を示し、彼女たちが誰にも、何にも損なわれることなく、自由に自己の可能性を花開かせる手助けになりたいというのが、授業科目としての「女性論」の切実な願いであるといえよう。

受講生たちの感想をこのようにまとめてみると、どれも短い簡略な発言であったとはいえ、授業や講演の内容を自分なりに消化したあとが認められる。三人で授業を担当し、六人もの学外講師をお呼びできたという恵まれた授業環境があったればこそと思われる。

\*

受講生の皆さんへ。率直な感想をきかせてくださってありがとうございます。「女性たちよ、語りなさい、書きなさい、女性のセクシュアリティをもって、女性のセクシュアリティを……」という、エレヌ・シクスの言葉を、最後に皆さんに贈ります。日々の喜びや、苦しや、悩みや、疑問や、その他もろもろを、言葉にすること、語りあうことから、「女性学をする」ということがきつと始まるのだと思います。

(にしかわ なおこ・東京都立大学)

本学兼任講師・フランス文学)